イエスと女性たち

ベン・ウィザリントン三世（Ben Witherington III） ・ ドイツ語訳：Hans-Jörg Ronsdorf ・ 2021年5月 ・ 2026年10月改訂

イエスは「急進的なフェミニスト」であった、と最近言われるようになりました。旧約聖書の文化と宗教の一部であることが明らかな、伝統的な家父長的枠組みを、意図的に掘り崩した人物だというのです。多くの人の主張によれば、イエス自身の教えと生き方は、夫と妻の関係についての**平等主義の見方**と、弟子としての男性と女性の役割を対等なものと見る見方だけが、イエスの世界観と一致する、というようなものでした。イエスの女性観をこのように分析するやり方は、学者の間でも一般信徒の間でも、四つの福音書の関連資料についての「正しい」解釈として、ますます受け入れられるようになってきました。**それでもなお、これは、キリスト教共同体における女性の位置をめぐる私たち自身の現代的な関心に合わせて、イエスとその見方を形づくろうとする、もう一つの試みではないのか、と問うてみる価値はあるかもしれません。**

私たちは実にしばしば、ある意図（あらかじめの決めつけ、あるいは前もっての判断）を持って聖書本文に向かいます。ですから、私たちが探しているものを見つけることが多いのも驚くにはあたりません！私たちは証拠を、部分的には真理を明らかにし、部分的には真理を覆い隠すようなやり方で用います。そしてしばしば、本文についての私たちの前提と、本文の扱い方とが、どのような結果を手にするかを左右してしまうのです。ロバート・ファンク（Robert Funk）がかつて言ったように、方法論は中立的な網ではありません。それは、捕らえるように意図されたものを捕らえるのです。

イエスの働きにおける女性たちという問題に関して、本文の中に自分の意図を読み込むという問題を避ける唯一の道は、関連資料を注意深く、包括的に、歴史的に研究することです。本文がその元の歴史的状況の中で、その著者と聞き手にとって何を意味していたのかを調べる前に、それが私たちにとって何を意味するのかを知っているかのように思い上がってはなりません。本文が今日、著者が当時語ろうとしたことと矛盾することを意味しえないのは、まったく明らかです。こうしたことを念頭に置きながら、関連する資料のいくつかを見ていきましょう。ただし、私が要約できるのは、私の研究書「Women in the Ministry of Jesus」（Cambridge: Cambridge University Press, 1984）の資料の一部だけです。

神の国のために去勢された者（宦官）となる

イエスは神の国を宣べ伝えるために来られました。それは女性たちにも影響を及ぼす出来事でしたが、イエスは、この御国において、またご自分の信じる者たちの共同体において、女性のふさわしい位置は何かという問題に直接取り組まれたわけではありません。それでも、その影響には目を見張るものがあります。たとえば、マタイの福音書19章10–12節の箇所を取り上げてみましょう。そこでイエスは、ご自分の御国に独身の人の居場所があることを告げておられます。

> 〔マタイ19:10–12〕「弟子たちはイエスに言った。『もし夫と妻の関係がそのようなものなら、結婚しないほうがましです。』しかし、イエスは言われた。『そのことばは、だれもが受け入れ

> られるわけではありません。ただ、それが許されている人だけができるのです。母の胎から独身者として生まれた人たちがいます。また、人から独身者にされた人たちもいます。また、天の御国のために、自分から独身者になった人たちもいます。それを受け入れることができる人は、受け入れなさい。』」

これは一見したところ、それほど急進的な考えには見えません。しかしそれを歴史的文脈の中で見ると、そうではなくなります。イエスの時代のユダヤ教の教師たちは、創世記1章28節が、身体の健康なすべての人に結婚して子孫を増やすよう命じていると信じていました。**自分の意思で独身でいることは、正当な選択肢ではありませんでした。**実際、ラビたちはしばしば、宦官（去勢された者）を神に対する侮辱と見なしていました。それとは対照的に、イエスは、神の国のために独身でいることは正当であると教えられました。この箇所は、イエスご自身がなぜ独身でおられたのかについての、イエスの弁明なのかもしれません。この教えは、イエスの働きにおける女性たちに深い影響を与えました。**それは、彼女たちがこの人生において、妻や母以外の何者かになる可能性を持っていたことを意味したのです。**ですから私たちはここに、ユダヤ教からの急進的な決別を見ます。ユダヤ教では、女性の居場所はもっぱら家庭であるべきだと言われていたからです。女性には、著名なラビの弟子になる可能性も、会堂で礼拝を導くための教育を受ける可能性もありませんでした。まして神殿で祭司として仕えることなど論外でした。

マルタとマリア

ルカの福音書10章38–42節で、私たちは、イエスがそのようなユダヤ教の態度についてどう考えておられたかを知ることができます。

> 〔ルカ10:38–42〕「さて、一行が進んで行くうちに、イエスはある村に入られた。すると、マルタという女の人がイエスを家に迎え入れた。彼女にはマリアという姉妹がいたが、主の足もとに座って、主のことばに聞き入っていた。ところが、マルタはいろいろなもてなしのために心が落ち着かず、みもとに来て言った。『主よ。私の姉妹が私だけにもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのですか。私の手伝いをするように、おっしゃってください。』主は答えられた。『マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことを思い煩って、心を乱しています。しかし、必要なことは一つだけです。マリアはその良いほうを選びました。それが彼女から取り上げられることはありません。』」

ここで私たちは、はっきりと対比の物語を見ます。マルタは伝統的なユダヤ人の女主人の役割を担い、一方マリアは熱心に聞き入る女弟子を表しています。「足もとに座る」という表現（10:39）は、ある人の弟子であることを意味する専門用語としてよく使われるもので、おそらくここでもその意味を持っています。マリアが台所を手伝わないことにマルタが腹を立て、それを何とかしようとしないイエスまでも責めたとき、物語はかなり意外な展開を見せます。イエスはマリアをもてなし係に追いやるのではなく、マリアは良いほうを選んだのであって、それが彼女から取り上げられることはない、と示されるのです。**彼女には、イエスの女主人であることよりも、イエスの女弟子であることへの権利、いやそれ以上に、より高い務めがあるのです。**これは、自分の十字架を負ってイエスに従うこと以上に優先されるものはない、というイエスの別の箇所での教

えと一致しています。しかし、それを女性に当てはめることは、ユダヤ教の世界では断じて受け入れられないと見なされたことでしょう。

女弟子たち

ルカの福音書8章1–3節から、私たちは、イエスとともに旅をする一行の中に女性たちがいたことを知っています。それ自体が、スキャンダラスなことと見なされたであろう事実でした。彼女たちはおそらく、弟子たちの妻ではなかったからです。

> 〔ルカ8:1–3〕「その後、イエスは町や村を巡って神の国を説き、福音を宣べ伝えられた。十二人もお供をした。また、悪霊や病気を治してもらった女たち、すなわち、七つの悪霊を追い出してもらったマグダラの女と呼ばれるマリア、ヘロデの執事クーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか多くの女たちも一緒であった。彼女たちは自分の財産をもってイエスに仕えていた。」

イエスがあざけりを込めて「罪人の友」と呼ばれたのは、まさに、女性やその他の権利を奪われた人々に、ご自分の共同体への自由で対等な入り口を与えられたからだったと考えられます。ルカの福音書8章1–3節で私たちはまた、これらの女性たちが、後に執事や女性執事が担うことになる働きを、共同体の中ですでに果たしていたらしいことにも気づきます。彼女たちは、共同体の物質的な必要と福祉のために配慮していたのです。

肉の家族と霊の家族

肉の家族に対する信仰の家族についてのイエスの教えの重要性は、いくら強調してもしすぎることはありません。マルコの福音書3章31–35節とその並行箇所のような箇所から明らかなのは、イエスが、ご自分の共同体に居場所を求める根拠を、血筋ではなく信仰に見ておられたということです。

> 〔マルコ3:31–35〕「さて、イエスの母と兄弟たちがやって来て、外に立ち、人を送ってイエスを呼んだ。大勢の人がイエスを囲んで座っていた。彼らは『ご覧ください。あなたの母上と兄弟たちが、外であなたを捜しています』と言った。すると、イエスは彼らに答えられた。『わたしの母、わたしの兄弟たちとはだれでしょうか。』そして、ご自分の周りに座っている人たちを見回して言われた。『ご覧なさい。わたしの母、わたしの兄弟たちです。だれでも神のみこころを行う人、その人がわたしの兄弟、姉妹、母なのです。』」

実際、マルコの福音書3章21節以下は（ヨハネ7:5参照）、イエスとの肉のつながりが、かえってイエスを理解するうえでのつまずきの石となりえたことを示唆しています。さらに、マルコの福音書10章29–30節、ルカの福音書12章49–53節とその並行箇所、さらにルカの福音書9章57–62節のような箇所は、イエスにとって、肉の家族ではなく信仰の家族こそが、神の国の中での基本的な関係の単位と見なされるべきものであることを明らかにしています。確かに、ある肉の家族が（マリア、マルタ、ラザロのように）キリスト者であった場合には、肉の家族と信仰の家族は一緒に立つことができました。しかし、肉の家族がイエスへの忠誠をめぐって分裂し、信じる者たちのからだに仕えるのではなく、それを引き裂こうとする場合には、信仰の家族の優先が先立たなけ

ればなりません。マルコの福音書3章31–35節が意味しているのは、ほかでもなく、信仰における兄弟姉妹こそが第一の家族であり、何よりもまずその家族に忠実でなければならない、ということです。もし二者択一の状況が生じたなら、イエスの忠誠がどこにあり、イエスが弟子たちにそれをどこに期待されたかは明らかです。この姿勢は、程度は小さいものの、ラビとその弟子たちの間にも見られます。そこでは時に、弟子は、「自分をこの世に生み出した」両親よりも、「自分を来たるべき世へと導いた」教師に第一の忠誠を負っている、と主張されました。しかしイエスは、この原則をもっと急進的かつ徹底したやり方で適用されました（ルカ11:27–28、12:49–53参照）。このことがキリストにある私たちの関係にとって何を意味するのかを、教会はまだすべて取り入れてはいません。

井戸のそばのサマリアの女

女性による、ご自分についての証言の価値をイエスがどう見ておられたかについての、さりげない証拠が、ヨハネの福音書4章に見られます。井戸のそばの女の物語はあまりによく知られているので、繰り返す必要はないでしょう。しかし、この物語のいくつかの点が、女性に対するイエスの態度を示しています。第一に、ユダヤ教の教師たちは、ユダヤ人の男性は公の場で女性と、とりわけ見知らぬ女性とは、ほとんど、あるいはまったく話すべきではないと主張していました。このことは、「評判の悪い」女性や「異邦の出」の女性については、なおさら当てはまりました。サマリア人の女性は、ラビたちの間では「母の胎にいるときから月経中の者」、すなわち常に汚れており、触れてはならない、のけ者と見なされていました。ですから弟子たちの目には、イエスがこの井戸のそばの女と話すことなど何もないはずでした。ところがイエスは、彼女と話されるだけでなく、彼女を汚れた者として扱うことを拒み、第四の福音書全体の中でも最も重要な神学的対話の一つに彼女を引き込まれます。**このことは、彼女のような女性でさえ、神学的な教えを受けるにふさわしい人であり、まさに弟子となるにふさわしい候補者であったことを示しています。**第二に、第四の福音書記者が強調しているのは、イエスの男性の弟子たちが満腹にならない食べ物を探すのに忙しくしている間に、**この女性がほかの人々のところへ行って知らせを告げ広めたということです。その知らせが多くの人々をイエスのもとに来させ、永遠のいのちをもたらす食べ物について聞かせたのです**（4:39）。4章37–38節のたとえは、この女性が種を蒔く者、あるいは刈り入れる者の一人であることを示そうとしているのかもしれません。そうであれば、サマリアの女は第四の福音書記者によって、弟子としての役割を正しく生きて見せた人として描かれていることになります。十二人にとっては恥ずかしいことに、です。同じような性格のものとして、しかもより明確なのが、復活の最初の証人となることによって「使徒たちの使徒」となるようにと、イエスがマグダラのマリアに与えられた使命です（ヨハネ20:17–18）。

イエスときよめの規定

イエスが、きよいものと汚れたものについての旧約聖書の律法を、ご自分とご自分に従う者たちを拘束するものとは暗黙のうちに見なしておられないことも、特に重要です。たとえば、イエスは、死体に触れること（ルカ7:15）、罪深い女に触れられること（ルカ7:36以下）、あるいは長血をわずらう女に触れられること（マルコ5:27以下）を、汚れをもたらすものとは見なされませ

ん。実際、マルコの福音書7章1節以下ははっきりと、イエスがすべての食物をきよいと宣言されたと述べています（7:19後半）。それは、人から出て来るものだけが人を汚すことができるのであって、人に入るものや人に触れるものはそうではない、という原則に基づいていました（7:15）。

支配することと仕えること

肉の家族との関係においても、信仰の家族との関係においても女性にかかわる、もう一つの箇所は、ルカの福音書22章24–30節です。ここでイエスは、十二人がご自分に従う者たちに対してどのような指導、あるいは導きを行うべきかを定義しておられます。イエスは、彼らは人々を支配する異邦人のようであってはならず、イエスの模範に従って、すべての人に仕える者とならなければならない、と説明されます。**明らかにイエスにとって、かしらであることは、第一の仕える者であることを意味します。それは、より多くの特権ではなく、より多くの責任を求めるのです。**これは、彼らが教え、宣べ伝え、癒やすための権威を持たない、あるいは行使できない、ということではありません。**しかしそれが意味するのは、指導についての伝統的な家父長的モデルは、神の国において改革されなければならない、ということです。イエスが十二人の男性を、ご自分の復活の前にも後にも選び、任命されたことは、イエスにとって問題であったのが伝統的な指導の概念を退けることではなく、それを新たに秩序づけることであったことを明らかにしています。**この概念が神の国において何を意味していたにせよ、福音書記者たちがそれを、女性は良い知らせを告げ知らせることができない（ヨハネ20:17–18）とか、教会の重要な男性信徒を教えることさえできない（使徒18:24–26）という意味に理解していなかったことは明らかです。

イエスと離婚

ここまでの議論で述べてきたことは、物語の一面にすぎません。**もう一つの面は、伝統的な肉の家族の構造を強め、それを女性にとってより公正なものにしようとするイエスの関心について語っています。**結婚、家族、離婚についてのイエスの教えが、この事実をよく示しています。**たとえばイエスは、マタイの福音書5章27節以下で、姦淫の禁止をはっきりと厳しくしておられます。それは、からだの行いだけでなく、心の傾きにも及ぶべきだというのです。**さらにイエスは、マタイの福音書19章で（マルコ10章参照）、離婚に対して非常に厳しい立場を取っておられます。実際、多くの学者は、結婚がそもそも初めから不法なものであった場合（たとえば近親婚の場合）を除いて、イエスの見解は「離婚なし」であると主張するでしょう。イエスが離婚に反対する厳格な立場を取られたことは、マタイの福音書19章10節の弟子たちの反応から明らかです。弟子たちは、一部のラビが、姦淫の場合にだけ離婚すべきだと言っていたことを十分によく知っていました。もし弟子たちが、イエスは伝統的なユダヤ教の論争の一方の側に立っているにすぎないと理解していたなら、彼らがこのように反応したかどうかは疑わしいところです。マルコの福音書とルカの福音書でも、離婚を正当化できる理由は一つも挙げられていません。これらの福音書を受け取った最初の聞き手たちは、きっと、イエスが「離婚なし」を教えておられたと理解したことでしょう。イエスにとって離婚は姦淫であり、再婚も同様です。なぜなら神の目には、神が結び合わせた二人の結びつきは、おそらく死による場合を除いて、解消できないものだからです（マタイ19:9、マルコ10:11–12、ルカ16:18）。マタイの福音書19章8–9節で、**イエスはご自分の立**

場をモーセの立場と対比させておられます。モーセは心のかたくなさのゆえに離婚を許しましたが、イエスは今や、ご自分が新しい創造をもたらすのだから、神の本来の創造の秩序と意図が守られるべきだと主張されたのです。**さて、この教えがどれほど難しく、また議論を呼ぶものであったとしても、女性にとってのその全般的な効果は、妻としての役割において、はるかに大きな安心を得たということでした。**一部のラビたちは、男性が自分の妻よりも美しい女性を見つけた場合や、今の妻が朝食を焦がした場合には、離婚して再婚するのは自由だ、とさえ言っていました。イエスの共同体ではそうではありません。女性たちは、キリスト教の共同体においては、そのような気まぐれが離婚の理由にはなりえないと確信することができました。ですから、たとえマタイの福音書19章9節（5:32）が姦淫を理由とする離婚を認めているとしても（それはありそうにないことに思えますが）、イエスは男性の離婚の自由を大幅に切り詰められたのです（一世紀のユダヤ文化では、離婚できるのは男性だけでした）。

ヨハネの福音書7章53節–8章11節もまた、イエスが二重基準を容認されなかったことを明らかにしています。ここで問われるのは、同じく現行犯で捕らえられたはずの姦淫の男はどこにいるのか、ということです。明らかに、このユダヤ人の長老たちは、この件において、男性の罪よりも女性の罪のほうを重く見ていました。イエスは、そのような選択的で偏った裁きのやり方には加わられませんでした。**イエスは女性の罪を無視されるわけではありませんが、彼女を罪に定めることもなさいません。イエスの本当の断罪は、社会の「弱い」構成員を差別する制度に向けられているのです。**後にイエスは、身寄りのないやもめたちから、そのわずかな財産をだまし取る律法学者たちを批判されます（マルコ12:40とその並行箇所）。イエスはまた、年老いた親たちが、敬虔を口実に自分の子どもたちから権利を奪われていることにも、深く心を痛めておられました（マルコ7:9–13）。また私たちは、イエスの働きにおいて子どもたちが特別な位置を占めていたことも知っています。イエスは、弟子たちの反対にもかかわらず、子どもたちがご自分のもとに来る権利を主張されました（マルコ10:13以下）。イエスは、身内を亡くした女性たち（ルカ7:11以下、ヨハネ11章）、病気の身内を抱える女性たち（マルコ7:24以下）、あるいは特別な問題を抱える女性たち（ルカ8:1–3）に同情を寄せられました。イエスと彼女たちとの交わり（ヨハネ12章、ルカ10章）と、苦い最後に至るまでの（十二人をさえ上回る）彼女たちのイエスへの忠実さは、イエスと、一部の男性の弟子たちから弟子の中で最も小さい者として扱われていたかもしれず、その言葉さえ信用されなかった人々（ルカ24:11）との間に、特別な関係があったことを示しています。**これらすべてのことは、ユダヤ教の中での弱められた地位と比べて、イエスの共同体の中で女性が担うことのできた役割が、きわめて注目すべき形で高められたことを示しています。**ユダヤ教では、女性は毎月の汚れのゆえに、会堂でトーラーを朗読することも、指導的な評議会に加わることも許されていませんでした。

イエスの言葉と行いについての私たちの研究は、イエスが、すべての点ではないにせよ、多くの点で同時代のユダヤ人たちとは異なっていた、という結論に私たちを導きます。このことは、私たちの知る限り、イエスが身近なユダヤ人の環境を長い間離れることは一度もなく、さらに重要なことに、ご自分の使命を特に同胞のユダヤ人たちに向けておられたことを考えると、いっそう注目に値します。

離婚に対するイエスの厳格な拒否は、当時のほとんどすべての人の気分を害したことでしょう。さらに、独身でいることは、それが与えられた人々にとって正当な召しであって異常なものではない、というイエスの見解は、男性には結婚して子孫を増やす義務があるという、ローマ帝国のさまざまな地域で支配的だった見方に反するものでした。そしてそれは、イエスの故郷パレスチナにおいてほど強く当てはまる場所はほかにありませんでした。私は先に、女性がイエスの共同体の中で、妻や母以外の役割をも担うことができるようになったのは、この教えによるのだと述べました。イエスが、とりわけ性的な事柄において、女性をさまざまな形で「スケープゴート」にすることを良しとされなかったことは、イエスをほかのラビたちとの対立に導きました。とはいえ疑いなく、多くの異邦人でさえ、イエスは「二重基準」を退けることで平等を推し進めすぎだと考えたことでしょう。**さらに私たちは、さまざまなユダヤ人著者たちとは異なり、イエスの口から、男性と比べた女性の本性や能力や宗教的な可能性についての否定的な発言を見いだすことはありません。**また、女性の証言の価値と証拠としての力についてのイエスの評価は、同時代の人々のすべてではないにしても、その大多数よりも高かったと考える理由があります（ヨハネ4:27–42参照）。信仰の家族の要求は、男性においても女性においても、肉の家族の要求に優先するというイエスの教え（マルコ3:31–35、10:29–30参照）は、ユダヤ人にとっても異邦人にとっても不快に感じられたであろう、いくつかの状況をも生み出しました。たとえば、どんな夫が（ユダヤ人であれ異邦人であれ）、ユダヤ人の巡回説教者の信奉者になるために、自分の妻が家と家族を離れることを快く許したでしょうか。それでもルカの福音書8章3節は、クーザの妻ヨハンナがそうしたことをおそらく示しています。**しかしこの教えは、イエスを、伝統的な家族構造をきっぱりと退けることへと導いたわけではありませんでした。また、どうやら、当時の地中海のさまざまな文化のすべてにある程度存在していた家父長的な枠組みを退けることへと導いたわけでもありませんでした。**コルバン、両親を敬うこと、離婚、そして子どもたちについてのイエスの教えは、イエスが伝統的な家族構造の否定を唱えておられたのではないことを明らかにしています。もしマタイの福音書5章27–32節とヨハネの福音書7章53節–8章11節が何かを示しているとすれば、イエスは、夫と男性の指導者たちが共同体にとって道徳的な模範となる責任を確認しておられたのです。**イエスがご自分の新しい共同体の指導者として十二人の男性を選ばれたことも、イエスが、ご自分がその中で働いておられた家父長的な枠組みを、退けるのではなく改革しようとしておられたことを推測させます。**

汚れについての律法に関する教え、安息日に一人の女性を癒やされたこと、公の場で見知らぬ女性と進んで言葉を交わされたことなど、イエスの特定の言葉と行いは、確かに同胞のユダヤ人たちにとっては明らかに不快なものでした。**しかし、イエスの故郷の文脈の外では、おそらくそれほど大きな騒ぎを引き起こさなかったでしょう。**同様に、女性が宗教的な教育を受ける権利や、宗教的指導者の女弟子になる権利に対するイエスの姿勢も、ユダヤ人にとっては疑いなく衝撃的だったでしょうが、当時の多くのローマ人やギリシア人には急進的なものとは映らなかったでしょう。

女性とその役割についてのイエスの見方は、当時のどの区分にも当てはまりません。イエスは、ある点ではどちらのグループとも共通するものを持っておられたものの、これらの事柄においては、クムラン派でもなければ、伝統的なラビでもありませんでした。架空の物語においても実際

の出来事においても、女性をご自分に従う者たちのための信仰の模範として用いられたことや、両親を敬うことについての教えは、ラビ文献の中に例がないわけではありません。神の国の到来を見すえて、男性と女性に神への徹底した献身を呼びかけられたことには、バプテスマのヨハネやクムランの教えとのある種の類似点があります。しかし全体として見ると、そして特にそのユダヤ教的な文脈を考慮すると、**イエスは、ご自分の民の間で一般的だった女性とその役割についての見方を、独自の、そして時に急進的な形で改革された方であるように思われます。さらに、福音書記者たちが福音書を書いた時点では、女性に対する新しく、より開かれた姿勢は、まだ訴え続けなければならないものだったように思われます。**もしかすると、まさにそれが、第三と第四の福音書記者が、さまざまな女性を聞き手のための宗教的な模範として示そうと努めている理由なのかもしれません。**では、女性とその役割についてのこれらの新しい姿勢は、イエスの共同体に加わった女性たちにどのような影響を与えたのでしょうか。イエスの共同体は、ユダヤ教が女性に与えていたものと比べて、地位と役割に関して女性たちに何を提供したのでしょうか。**

まず第一に、福音書の中だけでなく、使徒の働きや書簡（たとえばローマ人への手紙16章）においても、キリスト教のメッセージが女性に与えた影響がかなり大きかったことは明らかです。イエスの教えが女性たちを引きつけたのは、一つには、キリスト教共同体の中で彼女たちに認められた新しい役割と対等な地位のゆえであったと考えられます。ギリシアとローマには、男性だけに限られた祭儀や、せいぜい非常に限られた形でしか女性の参加を許さない祭儀がたくさんありました。さらに、会堂の共同体の周縁にいた女性たちがキリスト教への改宗者となった理由も容易に理解できます。ユダヤ教は女性の改宗者に、せいぜい限られた居場所しか提供しませんでした。彼女たちは、宗教的な務めへの参加を制限するラビたちの規則に直面していたからです。女性は、会堂を設立するために必要な最低人数（minyan）に数えられることも、ユダヤ教の契約のしるしを受けることもできませんでしたが、キリスト教の教会には、そのような制限はありませんでした。**これらの問題においてキリスト教がその宗教上の母であるユダヤ教と異なっていた理由の、必要かつ十分な説明は、イエスが、宗教的実践における女性の役割を制限していた聖書の伝統ともラビの伝統とも決別し、女性の価値やその証言をおとしめようとする試みを退けられた、ということです。**こうしてイエスの共同体は、イースターの前にも後にも、女性に、男性とともに（いくつかの異教の祭儀のように男性と分けられてではなく）、信仰の家族に完全に参加する対等な権利を与えました。それは、同時代のユダヤ教や多くの異教の祭儀において、女性が持っていなかった権利でした。弟子であることの優先順位についてのイエスの教え、女性をご自分の弟子として、また旅の同行者として進んで受け入れられたこと（ルカ8:1–3、10:38–42参照）、そして宦官についての教えと、何が人を汚すのかについての教えは、女性がイエスの共同体の中で重要な役割を果たすための道を、実際に整えたのです。だれでもイエスを信じ、イエスに従うことができました。イエスは、ご自分の信仰の家族に加わるために、ほかのどんな前提条件も求められませんでした。

女性がイエスの教会の中で担うことができ、また実際に担った役割に関して、特にルカは、とりわけイースター後の教会において、多種多様な務めが女性によって担われたことを示しています。第三の福音書記者は（ルカ8:3、使徒9:36–42参照）、女性たちがかなりしばしば、もてなしや物質的な支援という伝統的な役割を、ただし今やイエスの教会への奉仕として、ふたたび担ったこと

を示唆しています。そのような役割は、それが女性にとって「必要なことは一つだけ」（ルカ10:38–42）を選ぶことや、それについてもっと学ぶことの妨げにならない限り、受け入れられるものでした。

イエスの教えと共同体は、ユダヤ人の女性よりも異邦人の女性によって、より容易に、より自然に受け入れられたかもしれません。しかしそれは、異邦人の女性よりもユダヤ人の女性に対して、地位と役割の面でより多くのものを提供しました。ユダヤ人の女性にとって、偉大な教師の女弟子になること、イエスとともに旅をする信奉者になること、「神の国のために」独身でいること、さらには子ども以外の人々に対して信仰の教師になることは、どれもイエスの共同体に加わる前には存在しなかった可能性でした。それにもかかわらず、キリスト教の信仰と共同体は、ユダヤ人でない女性たちにも実に多くのものを提供しました。上に述べた務めに加えて、罪からの贖いの提供、新しい自己理解と新しい目的をもって人生を始めることへの招き、そしてその主が使命を特に虐げられた人々に向けておられた共同体に積極的に参加することへの招きは、異邦人の女性にとってもユダヤ人の女性にとっても、非常に魅力的なものでした。**この新しい地位と新しい役割は、その一部がそれ以前にはこれらの女性たちに与えられていなかったものであり、女性たちがイエスの共同体に大勢流れ込んだことを説明する要因なのです。**

福音書の中に現れるもう一つのモチーフは、女性を、イエスについての真理、とりわけその死、埋葬、空の墓、そして復活された方としての現れについての真理の、信頼できる証人として描いていることです（たとえばヨハネの福音書4章）。それはやむをえないことだったのかもしれませんが、キリスト教のケリュグマ（宣教）の決定的な部分が、イエスに従った女性たちの証言に基づいていることは意義深いことです。**福音書記者たちの功績は、この事実を取り繕おうとしていないことです。それどころか、第一の福音書記者、ルカ、第四の福音書記者、そしておそらくマルコも、それぞれ異なる仕方でこの事実を強調しています。**特に言及に値するのは、ルカが、イエスに従った女性たちの証言の正しさを、それが使徒ペテロによって確認されたことを示すことによって明らかにしているやり方です（ルカ24:1–10、12参照）。また注目すべきなのは、第四の福音書記者が、マルタの告白を、いわば聞き手のための模範として示していることです（ヨハネ11:27、20:31参照）。さらに、復活の物語は、福音書の他の部分と同様に、女性に対するイエスの姿勢がキリスト教共同体に与えた影響を証ししている傾向があります。というのも、これらの物語の中でも、またほかの場所でも、女性たちはこの共同体における証人として、また参加者として登場しているからです。

まとめ

この資料をこれ以上掘り下げる時間も紙幅もありません。イエスはご自分の働きの中で、女性に劇的な影響を及ぼす二つのことを同時に行われた、と言えば十分でしょう。一方でイエスは、偏見と二重基準と闘いながら、女性たちがご自分の言葉と行いと働きの中で重要な位置と地位を占めることを可能にされました。その結果、とりわけユダヤ人の女性たちが、信仰の家族の中で新しい宗教的な権利と役割を得ることになりました。他方でイエスは、家族の中での女性の伝統的な役割を強める手立ても講じられました。ですから、イエスを「フェミニスト」と見るか「伝統

主義者」と見るかという新しい二者択一は、退けられなければなりません。**どちらの言葉も、どちらの極端も、イエスと女性たちとの関係を適切に言い表してはいません。**ほかの多くの領域と同じように、女性に対する、また女性とともになされたイエスの働きも、単純な分類を拒むものです。今日私たちは、イエスが宣べ伝え、パウロが受け継いだ健全なバランスを保とうと努めるのがよいでしょう。もし教会が、イエスが始められた新しいものか、イエスが確認された古いもののどちらかを無視するなら、肉の家族をさらに分裂させるか、神の女性たちの生活の中で働いておられる御霊を消してしまう危険にさらされます。

どうか神が、この二つの危険から私たちを守ってくださいますように。

ベン・ウィザリントン三世（Ben Witherington III）の厚意による許可を得て。

英語原文：ベン・ウィザリントン三世「Women in the Ministry of Jesus」、Ashland Theological Journal 17 (1984)、22–30頁。

強調はドイツ語訳者による。